赤い着物

横光利一

青空文庫

村の点燈夫は雨の中を帰っていった。火の点いた献灯の光りの下で、梨の花が雨に打たれていた。

炎は闇の中を眺めていた。点燈夫の雨合羽の襞が遠くへきらと光りながら消えていった。

「今夜はひどい雨になりますよ。お気をおつけ遊ばして。」

炎の母はそう客にいってお辞儀をした。

「そうでしょうね。では、どうもいろいろ。」

客はまた旅へ出ていった。

炎は雨が降ると悲しかった。向うの山が雲の中に隠れてしまう。路の上には水が溜った。河は激しい音を立てて濁り出す。枯木は山の方から流れて来る。

「雨、こんこん降るなよ。

屋根の虫が鳴くぞよ。」

炎は柱に頬をつけて歌を唄い出した。蓑を着た旅人が二人家の前を通っていった。屋根の虫は丁度その濡れた旅人の蓑のような形をしているに相違ないと炎は考えた。

雨垂れの音が早くなった。池の鯉はどうしているか、それがまた炎には心配なことであった。

「雨こんこん降るなよ。

屋根の虫が鳴くぞよ。」

暗い外で客と話している俥夫の大きな声がした。間もなく、門口の八つ手の葉が俥の幌で揺り動かされた。俥夫の持った舵棒が玄関の石の上へ降ろされた。すると、幌の中からは婦人が小さい女の子を連れて降りて来た。

「いらっしゃいませ。今晩はまア、大へんな降りでございまして。さア、どうぞ。」

炎の母は玄関の時計の下へ膝をついて婦人にいった。

「まアお嬢様のお可愛らしゅうていらっしゃいますこと。」

女の子は眠むそうな顔をして炎の方を眺めていた。女の子の着物は真赤であった。炎の母は婦人と女の子とを連れて二階の五号の部屋へ案内した。炎は女の子を見ながらその後からついて上ろうとした。

「またツ、お前はあちらへ行っていらっしゃい。」と母は叱った。

炎は指を食わえて階段の下に立っていた。田舎宿の勝手元はこの二人の客で、急に忙しそうになって来た。

「三つ葉はあって？」

「まア、卵がないわ。姉さん、もう卵がなくなってしまったのね。」

活気よく炎の姉たちの声がした。茶の間では銅壺が湯気を立てて鳴っていた。炎はまた縁側に立って暗い外を眺めていた。飛脚の提灯の火が街の方から帰って来た。びしょ濡れになった犬が首を垂れて、影のように献燈の下を通っていった。

宿の者らの晩餐は遅かった。炎は御飯を食べてしまうともう眠くなって来た。彼は姉の膝の上へ頭を乗せて母のほつれ毛を眺めていた。姉は沈んでいた。彼女はその日まだ良人から手紙を受けとっていなかった。暫くすると、炎の頭の中へ女の子の赤い着物がぼんやりと浮んで来た。そのままいつの間にか彼は眠ってしまった。

翌朝炎はいつもより早く起きて来た。雨はまだ降っていた。家々の屋根は寒そうに濡れていた。鶏は庭の隅に塊っていた。

炎は起きると直ぐ二階へ行った。そして、五号の部屋の障子の破

れ目から中を覗いてみたが、蒲団の襟から出ている丸髷とかぶらの頭が二つ並んだままだなかなか起きそうにも見えなかった。

炎は早く女の子を起したかった。彼は子供を遊ばすことが何よりも上手であった。彼はいつも子供の宿ったときに限ってするように、また今日も五号の部屋の前を往ったり来たりし始めた。次には小さな声で歌を唄った。暫くして、彼はソッと部屋の中を覗くと、婦人がひとり起きて来て寝巻のまま障子を開けた。

「坊ちゃんはいい子ですね。あのね、小母さんはまだこれから寝なくちゃならないのよ。あちらへいってらっしゃいな。いい子ね。」

炎は婦人を見上げたまま少し顔を赧くして背を欄干につけた。

「あの子、まだ起きないの?」

「もう直ぐ起きますよ。起きたら遊んでやって下さいな。いい子ね、坊ちゃんは。」

炎は障子が閉まると黙って下へ降りた。母は竈の前で青い野菜を洗っていた。炎は庭の飛び石の上を渡って泉水の鯉を見にいった。鯉は静に藻の中に隠れていた。炎はちょっと指先を水の中へつけてみた。炎の眉毛には細かい雨が溜り出した。

「炎ちゃん。雨がかかるじゃないの。炎ちゃん。雨がよう。」と姉がいった。

二度目に炎が五号の部屋を覗いたとき、女の子はもう赤い昨夜の着物を着て母親に御飯を食べさせてもらっていた。女の子が母親の差し出す箸の先へ口を寄せていくと、炎の口も障子の破れ目の下で大きく開いた。

炎はふとまだ自分が御飯を食べていないことに気がついた。彼は直ぐ下へ降りていった。しかし、彼の御飯はまだであった。炎は裏の縁側へ出て落ちる雨垂れの滴を仰いでいた。

「雨こんこん降るなよ。

屋根の虫が鳴くぞよ。」

河は濁って太っていた。橋の上を駄馬が車を輓いて通っていった。生徒の小さ番傘が遠くまで並んでいた。炎は弁当を下げたかった。早くオルガンを聴きながら唱歌を唄ってみたかった。

「炎ちゃん。御飯よ。」と姉が呼んだ。

茶の間へ行くと、炎の茶碗に盛られた御飯の上からはもう湯気が昇っていた。青い野菜は露の中に浮んでいた。炎は自分の小さい箸をとった。が、二階の女の子のことを思い出すと彼は箸を置いて口を母親の方へ差し出した。

「何によ。」と母は訊いて炎の口を眺めていた。

「御飯。」

「まア、この子ってば!」

「御飯よう。」

「そこにあなたのがあるじゃありませんか。」

母はひとり御飯を食べ始めた。炎は顎をひっ込めて少しふくれたが、直ぐまた黙って箸を持った。彼の椀の中では青い野菜が凋れたまま泣いていた。

三度目に炎が五号の部屋を覗くと、女の子は座蒲団を冠って頭を左右に振っていた。

「お嬢ちゃん。」

炎は廊下の外から呼んでみた。

「お這入りなさいな。」と、婦人はいった。

炎は部屋の中へ這入ると暫く明けた障子に手をかけて立っていた。

女の子は彼の傍へ寄って来て、
「アッ、アッ。」といいながら座蒲団を炙の胸へ押しつけた。
炙は座蒲団を受けとると女の子のしていたようにそれを頭へ冠ってみた。
「エヘエヘエヘエヘ。」と女の子は笑った。
炙は頭を振り始めた。顔を顰めて舌を出した。それから眼をむいて頭を振った。
女の子の笑い声は高くなった。炙はそのままころりと横になると女の子の足元の方へ転がった。
女の子は笑いながら手紙を書いている母親の肩を引っ張って、
「アッ、アッ。」といった。
婦人は炙の方をちょっと見ると、
「まア、兄さんは面白いことをなさるわね。」といっておいて、また急がしそうに、別れた愛人へ出す手紙を書き続けた。
女の子は炙の傍へ戻ると彼の頭を一つ叩いた。
炙は「ア痛ッ。」といった。
女の子は笑いながらまた叩いた。
「ア痛ッ、ア痛ッ。」
そう炙は叩かれる度ごとにいいながら自分も自分の頭を叩いてみて、
「ア痛ッ、ア痛ッ。」といった。
女の子が笑うと、彼は調子づいてなお強く自分の頭をぴしゃりぴしゃりと叩いていった。すると、女の子も、「た、た。」といいながら自分の頭を叩き出した。
しかし、いつまでもそういう遊びをしているわけにはいかなかった。炙は突然犬の真似をした。そして、高く「わん、わん。」と吠えながら女の子の足元へ突進した。女の子は恐わそうな顔をして炙の頭を強く叩いた。炙はくるりとひっくり返った。
「エヘエヘエヘエヘ。」とまた女の子は笑い出した。
すると、炙はそのままひっくり返りながら廊下へ出た。女の子はますます面白がって炙の転がる後からついて出た。炙は女の子が笑えば笑うほど転がることに夢中になった。顔が赤く熱して来た。
「エヘエヘエヘエヘ。」
いつまでも続く女の子の笑い声を聞いていると、炙はもう止まることが出来なかった。笑い声に煽られるように廊下の端まで転がって来ると階段があった。しかし、彼にはもう油がのっていた。彼はまた逆様になってその段々を降り出した。裾がまくれて白い小さな尻が、「ワン、ワン。」と吠えながら少しずつ下がっていった。
「エヘエヘエヘエヘ。」
女の子は腹を波打たして笑い出した。二、三段ほど下りたときであった。突然、炙の尻は撃たれた鳥のように階段の下まで転った。
「エヘエヘエヘエヘ。」
階段の上では、女の子は一層高く笑って面白がった。
「エヘエヘエヘエヘ。」
物音を聞きつけて炙の母は馳けて来た。
「どうしたの、どうしたの。」
母は炙を抱き上げて揺ってみた。炙の顔は揺られながら青くなってべたりと母親の胸へついた。
「痛いか、どこが痛いの。」
炙は眼を閉じたまま黙っていた。

母は灸を抱いて直ぐ近所の医者の所へ馳けつけた。医者は灸の顔を見ると、「アッ。」と低く声を上げた。灸は死んでいた。

その翌日もまた雨は朝から降っていた。街へ通う飛脚の荷車の上には破れた雨合羽がかかっていた。河には山から筏が流れて来た。何処かの酒庫からは酒桶の輪を叩く音が聞えていた。その日婦人はまた旅へ出ていった。

「いろいろどうもありがとうございまして。」

彼女は女の子の手を持って灸の母に礼をいった。

「では御気嫌よろしく。」

赤い着物の女の子は俥の幌の中へ消えてしまった。山は雲の中に煙っていた。雨垂れはいつまでも落ちていた。郵便脚夫は灸の姉の所へ重い良人の手紙を投げ込んだ。

夕暮れになると、またいつものように点燈夫が灸の家の門へ来た。献燈には新らしい油が注ぎ込まれた。梨の花は濡れ光った葉の中で白々と咲いていた。そして、点燈夫は黙って次の家の方へ去っていった。

青空文庫情報

底本：「日輪・春は馬車に乗って　他八篇」岩波文庫、岩波書店
　　1981（昭和56）年8月17日第1刷発行
　　1997（平成9）年5月15日第23刷発行
入力：大野晋
校正：伊藤祥
1999年7月9日公開
2003年10月20日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤い着物

横光利一

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/